

第 27 回大学博物館等協議会
第 19 回日本博物科学会
大会案内・要旨集

2024 年 6 月 27 日（木）・28 日（金）

第 27 回大学博物館等協議会・第 19 回日本博物科学会実行委員会

琉球大学博物館（風樹館）

第 27 回大学博物館等協議会
第 19 回日本博物科学会
大会案内・要旨集

会期：2024 年 6 月 27 日（木）・28 日（金）

会場：琉球大学研究者交流施設・50 周年記念館

大学博物館等協議会会長 西秋 良宏（東京大学総合研究博物館館長）

日本博物科学会会長 西秋 良宏（東京大学総合研究博物館館長）

第 27 回大学博物館等協議会・第 19 回日本博物科学会実行委員会

委員長 辻 瑞樹（琉球大学博物館（風樹館）館長）

ご挨拶

第 27 回大学博物館等協議会・第 19 回日本博物科学会の開催にあたって

第 27 回大学博物館等協議会・第 19 回日本博物科学会を完全対面形式による琉球大学で開催する運びとなりました。実はこの沖縄大会は当初一昨年に計画されていたのですが、当時はまだコロナ禍の最中でした。沖縄での開催ということで旅行を楽しみにされている方も多いと考え、各方面のご協力のもと 2 年延期させていただきました。延期開催にご協力いただいた、協議会・博物科学会の執行部と事務局の皆さんに心より感謝申し上げます。

第 27 回大学博物館等協議会では恒例のシンポジウムを開催します。テーマは「大学博物館との連携で拓く地域・学術の未来」としました。沖縄国立自然史博物館誘致活動も含めて、大学博物館が行う連携について議論します。日本初となる国立ナチュラルヒストリーミュージアムの誘致運動は、これまで生物科学連合、日本学術会議、沖縄県を中心に展開されてきました。しかしながら、博物館関係者のあいだでもまだ細部まで周知されているわけではありません。そこで、その位置付けや意義に関しこの場で議論することで、大学博物館関係者との積極的な情報共有を目指したいと考えます。

6 月末の沖縄はおそらく梅雨も明け、涼しかった昨年の北海道とはガラリと変わった空気のなかで、独特の文化と自然をお楽しみいただけるのではないかと想像します。唯一、台風が心配ですが、「なんくるなるさ」で乗り切りたいと存じます。多数のご来沖を歓迎します。

風樹館（琉球博物館）館長 辻 瑞樹

協議会・博物科学会 プログラム

6月27日(木) 会場：50周年記念館

12:00 受付開始 (50周年記念館 入り口)

13:00 大学博物館等協議会 (会場：1階多目的AB)

13:05 挨拶 実行委員長 辻 瑞樹 (琉球大学博物館(風樹館)館長)

13:10 シンポジウム「大学博物館との連携で拓く地域・学術の未来」

13:15 趣旨説明 辻 瑞樹 (琉球大学博物館(風樹館)館長)

13:20

S-01 講演「『国立沖縄自然史博物館』構想について」
西田 睦 (琉球大学・学長)

S-02 講演「琉球諸島：世界自然遺産のまるとミュージアム」
伊澤 雅子 (北九州市立自然史・歴史博物館・館長)
休憩 (5分)

14:15

S-03 講演「風樹館が取り組んできた地域連携と学術支援」
佐々木 健志 (琉球大学博物館(風樹館)・助教)

S-04 講演「北海道の特色を活かした教育研究のための
室蘭工業大学－国立アイヌ民族博物館の連携活動」
上井 幸司 (室蘭工業大学・准教授)
休憩 (5分)

15:10 パネル・ディスカッション

15:35 休憩 (10分)

15:45 大学博物館等協議会館長会議・日本博物科学会理事会
(会場：1階多目的AB)

16:50 休憩 (10分)

17:00 大学博物館等協議会総会・日本博物科学会総会
(会場：1階多目的AB)

18:00 散会

6 月 28 日 (金)

9:00 日本博物科学会 研究口頭発表 (会場: 1 階多目的 AB)

9:00 口頭発表 (4 題)

10:15 休憩 (10 分)

10:25 口頭発表 (3 題)

11:30 昼食

12:30 口頭発表 (4 題)

13:50 休憩 (10 分)

14:00 口頭発表 (4 題)

15:20 休憩・移動 (20 分)

15:45 特別見学会 琉球大学博物館 (風樹館)

17:00 散会

* 会場から博物館 (風樹館) まで約 1km は徒歩での移動となります。

* 会場で手荷物等をお預かりすることはできません。

口頭発表 プログラム

(6月28日(金)、会場：50周年記念館 多目的 AB)

9:00-9:20

0-01 ○石丸 恵利子 (広島大学総合博物館)

「広島大学総合博物館による教養ゼミでの文化財への意識付け」

9:20-9:40

0-02 ○松永 篤知^{1,2}・河合 望^{1,2}・菅原 裕文³・市川 彰²・足立 拓朗^{1,2}

(¹金沢大学資料館・²金沢大学古代文明・文化資源学研究所・³金沢大学人間社会研究域人文学系)

「金沢大学資料館における学生企画展について」

9:40-10:00

0-03 ○塩澤 真奈¹・○崎原 洸太¹・土井 双葉¹・伊藤 璃紗¹・宇野 晴香¹・森田 雅也¹・上田 裕尋²・齊藤 有里加²・金子 敬一³

(¹東京農工大学科学博物館支援団体 musset・²東京農工大学科学博物館・³東京農工大学工学研究院先端情報科学部門)

「博物館支援学生団体によるイベント「歯車で計算?! タイガー計算器を触ってみよう!」の実施および成果」

10:00-10:20

0-04 ○伊藤 謙¹・波瀬山 祥子¹・船越 幹央¹・河原 源太¹

(¹大阪大学総合学術博物館)

「知のハブとしての大学博物館—MOU 資料部の共創活動—」

休憩 (10 分間)

10:30-10:50

0-05 ○梅村 綾子¹・柏木 晴香²・安部 琴子^{3,4}・柴山 潤太⁴・桂 宗広⁴・
宮下 明里⁴・武田和樹⁴

(¹名古屋大学博物館・²名古屋市科学館・³名古屋大学博物館学生運営スタッフ
団体 MusaForum・⁴名古屋大学生物研究会(学生サークル))

「ユニバーサル・ミュージアム：多感覚でつながる自然探究—夏鳥をみよ
う 2024 を実施して—」

10:50-11:10

0-06 ○高井 正成¹・武田 精一郎²・西岡 佑一郎³

(¹京都大学総合博物館・²東京大学総合研究博物館・³ふじのくに地球環境史
ミュージアム)

「ミャンマーのウシ科中足骨化石は何を語るのか」

11:10-11:30

0-07 ○佐藤 琴¹・小幡 圭祐¹・堀井 洋²・小川 歩美²・高田 良宏³・
榎本 千賀子⁴・櫻澤 孝佑⁵・卓 彦伶⁶

(¹山形大学附属博物館・²合同会社 AMANE・³金沢大学学術メディア創成セン
ター・⁴新潟大学人文学部・⁵奥会津振興センター・⁶北海道大学大学院文学研
究院)

「大学史資料の保存と継承のために—ガラス乾板のデジタル化を中心に
—」

昼食・休憩 (60 分間)

12:30-12:50

0-08 ○野口 悦 (大阪大学大学院医学系研究科 医学史料室)

「岸本記念医学史料館の開設～医学研究の発信の場に～」

12:50-13:10

0-09 ○清水 則雄¹・阿部 勝彦²・田口 勇輝²・池田 誠慈¹・三浦 郁夫³・
桑原 一司⁴

(¹広島大学総合博物館・²広島市安佐動物公園・³広島大学両生類研究センタ
ー・⁴日本オオサンショウウオの会)

「オオサンショウウオの種間交雑に関する深刻な課題～広島県の現状と大

学博物館の可能性～」

13:10-13:30

0-10 ○藺田 郁 (1大阪大学中之島芸術センター)

「大阪大学中之島芸術センター企画展「服部良一と笠置シヅ子：花開く大阪音曲」」

13:30-13:50

0-11 ○吉田 広 (愛媛大学ミュージアム)

「大学と地元財団の包括連携協定に基づく企画展」

休憩 (10 分間)

14:00-14:20

0-12 ○古田 亮 (東京藝術大学大学美術館)

(1大阪大学総合学術博物館・2九州大学総合研究博物館)

「Museum と死生観 ——Museum におけるモノの継承」

14:20-14:40

0-13 ○永田 裕美¹・中村 滋彦²・上出 広幸³・藤谷 泰裕^{2,4}・寺林 優⁵・
松本 由樹¹

(¹香川大学農学部・²姫路港運株式会社・³株式会社興徳クリーナー・

⁴昆虫ビジネス研究開発プラットフォーム・⁵香川大学博物館)

「形態機能学評価が示す博物館の「はぐくむ」姿とは何か」

14:40-15:00

0-14 ○西川 治 (秋田大学大学院国際資源学研究科附属鉱業博物館)

「鉱山県・秋田を未来につなげる～未記載鉱石標本の継承を目的としたデータベース化事業～」

15:00-15:20

0-15 ○栗原 祐司 (国立科学博物館)

「博物館改正法に伴う大学博物館の在り方」

大会事務局からのお知らせ

参加者の皆様へ

- ・当日は名札と領収証を受付でお受け取りください。
- ・会場で手荷物等をお預かりすることはできません。
- ・昼食は両日とも、琉球大学生協・中央食堂が利用可能です。
- ・50 周年記念館 2 階多目的交流ラウンジを休憩室とします。お茶等と菓子を準備しておりますので休憩や情報交換にお使いください。
- ・50 周年記念館では無線 LAN(eduroam)が利用できます。eduroam 参加組織の方で利用方法が不明の場合は、事前にご所属組織にお問い合わせください。
- ・情報交換会を 50 周年記念館 交流ラウンジで行います。
- ・宿泊は各自でホテル等のご予約をお願いいたします。

口頭発表について

- ・発表時間 15 分、質疑応答・発表者交代 5 分の計 20 分です。12 分に 1 鈴、15 分に 2 鈴、終了時に 3 鈴鳴らします。時間厳守でお願いします。
- ・発表用パソコンを各自ご持参ください（プロジェクターへの出力端子は HDMI を用意します。ご持参いただくことが難しい場合は、事務局でノート PC (Windows 10、PowerPoint、Acrobat Reader DC) を用意いたしますので、事前にご連絡ください。
- ・Apple 製品等、特殊な接続ケーブルが必要な場合は、各自でご持参ください。
- ・口頭発表が終わった方には次の発表の座長をしていただきますので、よろしく願いいたします。

各館ポスター・ポスター発表について

- ・本大会ではポスター発表はありません。
- ・各館紹介ポスターの掲示期間は、6 月 27 日（木）12:00～6 月 28 日（金）14:30 です。
- ・各館紹介ポスターの説明時間（コアタイム）は特に設けません、休憩時間等に各自で行ってください。

特別見学会について

- ・琉球大学博物館（風樹館）で特別見学会を実施します。
- ・特別見学会参加者は、博物科学会の口頭発表終了後に 50 周年記念館入口にお集まりください。スタッフが風樹館まで引率いたします。会場から約 1 km を徒歩での移動となります。

会場案内

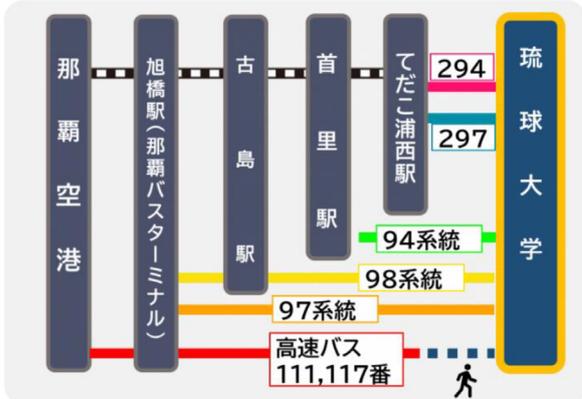
【千原キャンパス】



空港から

- モノレール(ゆいレール)で
那覇空港駅▶てだこ浦西駅(約40分370円)
▶バス 294・297 琉大附属小学校(約25分 260円)
- 高速バスで
111/113/117/123/152番線
国内線旅客ターミナル前▶琉大入口(約40~50分750円)

詳しくは大学HP▶<https://www.u-ryukyu.ac.jp/access/>

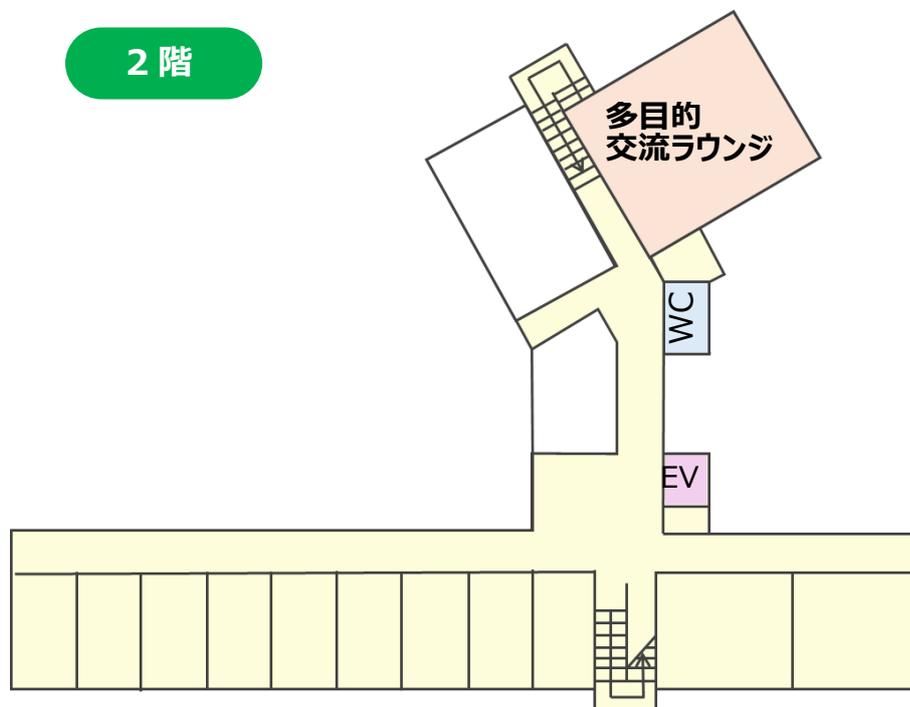


※ 交通渋滞のため、バスが定刻どおり運行していない場合があります。
※ 時間に余裕を持ってご来学くださいますよう、お願いします。



琉球大学博物館(風樹館)
〒903-0213
沖縄県中頭郡西原町字千原1番地
TEL: 098-895-8841
Mail: info@skr.u-ryukyu.ac.jp

【50 周年記念館】



シンポジウム・館長会議・理事会・総会・口頭発表：1 階 多目的 AB

情報交換会：1 階 交流ラウンジ

休憩室：2 階 多目的交流ラウンジ

第 19 回日本博物科学会発表要旨

会期：2024 年 6 月 27 日（木）・28 日（金）

会場：琉球大学研究者交流施設・50 周年記念館

O-01

広島大学総合博物館による教養ゼミでの文化財への意識付け

○石丸恵利子¹

(1 広島大学総合博物館)

広島大学では、新入生のカリキュラムの一部として「入学後の早い段階で、論理的・批判的な思考法と適切な自己表現能力を育てることを目標」として教養ゼミを開講している。各年度の担当教員がそれぞれ内容を設定する授業であるが、広島大学総合博物館では、2007年よりこの教養ゼミの1コマを使って、本館および自然散策道「発見の小径(こみち)」の解説付き見学を行うプログラムを提案している。

2024年度から東広島キャンパスの遺跡群の見学コースを追加設定した。新入生および教員にキャンパスの遺跡や地域の歴史について知ってもらうことが目的の一つであるが、文化財は貴重な国民的財産であり、また文化財保護への意識づけや文化財を守り未来に受け継いでいくことの大切さを伝える契機とするため、教養ゼミでの遺跡コースを提案した。

広島大学では、2015年に学生が国史跡にタイムカプセルを埋めるという文化財保護法違反があり、学生に対して文化財への意識を高める機会を設けることを東広島市から指導され、全学での取り組みとして「文化財保護に関する講演会」を開始した。これまで5回開催しているが、より多くの学生に継続的に文化財への意識付けや文化財保護法について知ってもらうため、教養ゼミの1コマでキャンパスの遺跡を見学するコースを新設した。

コースでは、展示室での出土遺物の見学や実際に遺跡の場所に立ち当時の暮らしや景観を体験することを通して、文化財が身近な存在であることや文化財を毀損しないために注意することなどを解説している。4月から6月の期間中、遺跡コースを含む計15コマの参加者約180名に対して、解説を聞いたのちに、文化財や遺跡、文化財保護法に対してどの程度興味や関心を持ってもらえたかについてのアンケート調査を行った。本発表では、アンケート結果について報告し、広島大学総合博物館による教養ゼミでの遺跡コースの意義や大学キャンパスの資源活用について考察する。

O-02

金沢大学資料館における学生企画展について

○松永篤知^{1,2}・河合望^{1,2}・菅原裕文³・市川彰²・足立拓朗^{1,2}

(¹金沢大学資料館・²金沢大学古代文明・文化資源学研究所・

³金沢大学人間社会研究域人文学系)

金沢大学資料館では、2016 年度から博物館実習の集大成としての学生企画展を展示室の企画展エリアを使って開催している。これは、当館の秋冬の企画展の一つでもあるが、アクティブ・ラーニング型の博物館実習の学内実習兼館園実習として、企画立案・資料調査・原稿作成・展示陳列作業・広報・撤収作業等、全てにおいて学生が主体となっていることを特徴としている。

基本的な流れとしては、毎年春に学生が企画案をプレゼンテーションし合った上で、投票により一つのテーマに絞り込み、それを全員で秋までに企画展として作り上げていく。そして、冬にミュージアムツアーやワークショップといった教育普及活動を実施して、最終的に撤収作業まで自分たちで行うのである。

年度によって多少の変動・変更はあるが、約 30 名の実習生の中からリーダー・サブリーダーを選出し、テーマ決定後に資料・キャプション班、デザイン班、展示班に分かれて班別に作業を進めつつ、ソーシャルメディア等を駆使しながら班の連携をとって企画展の完成に向かっていく。それに対して実習担当の教員や資料館職員は、学生の主体性を妨げない範囲でサポートやアドバイスを適宜行うというスタンスをとっている。

実習生がこれまでに選んだテーマは、「植物」、「恋愛」、「科学実験機器」、「寮生活」、「資料来歴」、「色彩」、「医学系前身校」、「光」、「国際交流」、「推し」と、実に多彩で、展示やワークショップにも毎回独自の工夫が見られる。その柔軟な発想に、当館教職員はいつも感心させられている。

昨年度記念すべき 10 回目を迎え、いまや学生企画展は本学の博物館教育には欠かせないものとなっている。その成果もあって、毎年のように実習生の中から学芸員を輩出しており、今後も改善を図りながらこの取り組みは長く続けていきたい。

O-03

博物館支援学生団体によるイベント 「歯車で計算?! タイガー計算器を触ってみよう!」の実施および成果

○塩澤真奈¹・○崎原洸太¹・土井双葉¹・伊藤璃紗¹・宇野晴香¹・森田雅也¹・
上田裕尋²・齊藤有里加²・金子敬一³

(¹東京農工大学科学博物館支援団体 musset・²東京農工大学科学博物館・
³東京農工大学工学研究院先端情報科学部門)

東京農工大学科学博物館では2023年11月11日から2024年6月1日の期間に「タイガー計算キ展」を開催した。本企画展では、工学部知能情報システム工学科が保管する機械式計算器の一つであるタイガー計算器を展示、紹介した。これに際し、東京農工大学科学博物館支援学生団体 musset では2024年2月17日に本企画展の関連イベントとして「歯車で計算?! タイガー計算器を触ってみよう」を実施した。

タイガー計算器はその計算の性質上、歯車を回すという体感を以って四則演算を理解することができる。来館者に計算の仕組みを体感してもらうことで、計算に不慣れな子供でも計算を面白く感じてもらうことを目指した。そこで、来場者とともにタイガー計算器を操作するワークショップ形式のイベントを実施した。当初はタイガー計算器の歴史や原理を詳しく説明していたが、実際の計算体験を重視すべきという意見が出た。そこで、歴史や操作説明は簡潔にして、双方向性コミュニケーションの中で参加者が計算に取り組む時間が多くなるように設計し直した。詳しく知りたい参加者にはプリントを別途作成・配布した。来場者の対象年齢や算数の理解度に差があることが予想されたため、解き進めるほど難易度が上がるドリル(ドンネドリル)を用意して対応した。

当日は小学生から高齢者までの15組22人の一般来館者が参加した。機械式計算器を使って体感的に計算をすることで、参加者が計算の仕組みや面白さを実感できたことがアンケート結果から確認できた。今回はイベント形式や博物館資料という制約上、限られた人数にしか体感してもらうことができず、また、目的に沿ったアンケートを用いた定量調査が必要である。今後はブース形式などでのイベントとして再企画し、より多くの人と計算の魅力を共有し、かつタイガー計算器の継承に貢献していきたい。



O-04

知のハブとしての大学博物館—MOU 資料部の共創活動—

○伊藤謙¹・波瀬山祥子¹・船越幹央¹・河原源太¹

(¹大阪大学総合学術博物館)

大阪大学総合学術博物館（MOU）は、「知のハブ」としての役割を果たしてきた。2023 年度には大阪大学中之島芸術センターが設立され、大学院生、学部生、社会人が芸術の実践に参画し、そのプロセスを共に体験する「共創芸術」の場として機能している。同センターは、芸術活動を通じた創造的な学びの場を提供し、MOU との協力関係を築いている。

MOU 資料部は、この協力関係を基に展示活動のみならず講座の面でも共創を推進してきた。具体的には、中之島芸術センター内での展示会や講演会の実施に加え、バーチャルミュージアムの構築といった最新技術を活用した取り組みも行っている。バーチャルミュージアムは、物理的な制約を超えて広範な知識共有を可能にし、博物館の役割を拡張する重要な手段である。

本発表では、MOU 資料部が実施している知のハブとしての共創活動について詳述する。これには、学際的な研究の促進、デジタル技術の活用による新たな展示手法の開発、そして地域社会との連携強化が含まれる。また、MOU と中之島芸術センターの協働による共創プロジェクトの具体例を紹介し、それが学術的および社会的にどのような影響を及ぼしているかを考察する。

特に、共創芸術を通じた学びの深化と知識の拡散については、従来の教育手法とは異なるアプローチを取り入れており、これが学生や社会人に与える影響についても検討する。バーチャルミュージアムに関しては、その概要および将来的な展望について述べていきたい。

MOU の知のハブとしての役割が、いかにして共創を通じて拡大し続けているかを示し、今後の展開についての展望を共有する。本発表が他の学術機関や博物館における共創活動の参考となることを期待したい。

O-05

ユニバーサル・ミュージアム：多感覚でつながる自然 探究—夏鳥をみよう 2024 を実施して—

○梅村綾子¹・柏木晴香²・安部琴子^{3,4}・柴山潤太⁴・桂宗広⁴・宮下明里⁴・武田和樹⁴
(¹名古屋大学博物館・²名古屋市科学館・³名古屋大学博物館学生運営スタッフ団体
MusaForum・⁴名古屋大学生物研究会(学生サークル))

ICOM の新博物館定義（2022 年）にあるように、「博物館は一般に公開され、誰もが利用でき、包摂的であって、多様性と持続可能性を育む」施設である。例えば、障がいの有無に関わらず、博物館の多様な利用を促していけるような展示・イベントを当事者とともに作っていくことが求められるだろう。これを踏まえて、ご自身が全盲である広瀬浩二郎教授（国立民族学博物館）が提唱する「ユニバーサル・ミュージアム—誰もが楽しめるミュージアム—」の理念を体現するイベント「夏鳥をみよう 2024」を、5 月 18 日名古屋大学博物館にて実施した。

我々は 2022 年より、市民参加型の生物モニタリング調査を取り入れた自然観察会企画をスタートさせ、毎年 5 月にバード・ウォッチングのイベント「夏鳥を見よう」を開催している。2024 年は初めて視覚障がい者の意見を取り入れ、タイトルの「見よう」を「みよう」と改めた。平仮名表記には、目で見ることにとどまらず、耳で聴くことや手で触ることなど、多感覚を研ぎ澄ませながら取り組む意図を込めた。

本企画では、視覚障がい者と晴眼者が混在したグループに分かれ、鳥に詳しいスタッフと博物館関係者がサポートにあたり、前半プログラムでキャンパス内の散策と後半で触察体験を実施した。散策では、姿が見えなくても鳴く鳥の声の判別に自ずと協力体制が生まれ、まさに視覚障がいの有無に関係なく発見や気づきを共有することができたと言える。結果、約 1 時間の散策で 15 種の鳥を確認した。触察体験では、カラスの羽根の構造と機能を考えるワークショップに加え、カラスの全身の剥製やトビの翼を手で触り、特徴を話し合った。視覚障がい者も晴眼者もカラスに触れる機会は稀だろう。「いかついイメージのカラスがふわふわで大きくて、かわいく思えた」との感想が共感を呼んでいた。

本企画は、博物館の包摂的な性質を体現すべく、準備から当日の運営まで、多くの当事者および関係者の協力を得て実施した。本発表では、その具体的な取り組みと成果について報告する。

O-06

ミャンマーのウシ科中足骨化石は何を語るのか

○高井正成¹・武田精一郎²・西岡佑一郎³

(1 京都大学総合博物館・2 東京大学総合研究博物館・3 ふじのくに地球環境史ミュージアム)

ミャンマー中央部を流れるイラワジ河流域に分布するイラワジ層は、陸棲脊椎動物化石を大量に産出することが知られている。京都大学の調査隊は、マグウェー市近郊のテビンガン地域に露出しているイラワジ層最下部から、ホミノイド・キリン・イノシシ・長鼻類・サイ・ウシなどの化石を発見した。年代は後期中新世初頭（約 850 万年前）で、ヒマラヤ山脈・チベット高原の隆起に伴うモンスーン気候の成立により、草原化・乾燥化が始まっていたと考えられている。最近の調査で、このテビンガン相の反芻類の中足骨化石に、2つのパターンが見られることが判明した。

現生の全てのウシ科の中足骨前面には、遠位端まで達する直線状の溝が存在するが、同じ反芻類のシカ科では、全ての現生種で遠位端まで達しない。この特徴は、化石種における両科の判別形質として重要視されてきた。テビンガンの反芻類の中足骨化石には「ウシ型」と「シカ型」が混在しているが、シカ科の最大の特徴である角化石は全く見つかっていない。また、南～東南アジア地域におけるシカ科の出現は鮮新世以降とされており、シカ科の可能性は低い。

このテビンガン相の「シカ型」中足骨の解釈のために、様々な文献や各地の博物館の骨格標本で、ウシ科とシカ科の中足骨の形態を再調査してみた。その結果、国立科学博物館所蔵のボンゴ *Tragelaphus eurycerus* (ウシ科) の 1 標本が「シカ型」を示すことが判明した。ところが、他のボンゴ標本を追加調査したところ、全標本が「ウシ型」であることが確認された。ボンゴにおける「シカ型」中足骨の存在をどのように解釈するかは難しい問題であり、ミャンマーの「シカ型」中足骨化石の謎もまだ解決されていない。しかし、反芻類におけるウシ科とシカ科の進化史を考える上で非常に興味深い事例と言える。今後の国内外の博物館所蔵標本の調査が必要である。



ウシ型



シカ型

ミャンマーの中足骨化石の 3D 復元図

O-07

大学史資料の保存と継承のために －ガラス乾板のデジタル化を中心に－

○佐藤琴¹・小幡圭祐¹・堀井洋²・小川歩美²・高田良宏³・榎本千賀子⁴・
櫻澤孝佑⁵・卓彦伶⁶

(¹山形大学附属博物館・²合同会社 AMANE・³金沢大学学術メディア創成センター・
⁴新潟大学人文学部・⁵奥会津振興センター・⁶北海道大学大学院文学研究院)

ふすま同窓会は、旧制山形高等学校（1920年創立・以下「山高」と表記）および山形大学人文社会科学部・理学部の同窓会である。ふすま同窓会館には山高の卒業アルバムなどの資料が多数所蔵されている。

コロナ禍により1年延期されたが、2021年には百年記念祭が実施された。本祭に合わせて山形大学附属博物館にて行う予定にしていた特別展は大学への入構禁止措置のために実現しなかった。その代わりにオンラインコンテンツ「小白川キャンパスの100年 旧制山形高等学校から山形大学へのあゆみ」(<http://museum.yamagata-u.ac.jp/online-exhibitions/fusuma/>)を製作し公開した。

山高関係資料はこの準備期間にほぼ把握したと筆者は考えていたが、2022年にふすま同窓会長から、同窓会館にガラス乾板が大量にあることを知らされ、その保存と活用について相談された。そこで2023年度に筆者が獲得した「地域資料データの保存と公開」にかかる受託研究事業においてデジタル化と保存環境の整備を進めることとした。その結果、約1800枚の撮影と仮保存箱への収納が完了した。これらの画像は2024年度中に山形アーカイブにて公開する予定である。本発表では①大学史資料の発掘、②ガラス乾板の保存と整理、③肖像写真の公開、について現段階での筆者の見解を述べたい。



整理前のガラス乾板

O-08

岸本記念医学史料館の開設 ～医学研究の発信の場～

○野口悦¹

(¹大阪大学大学院医学系研究科 医学史料室)

大阪大学 大学院医学系研究科には、これまでも銀杏会館に医学史料展示室があり、適塾の開設を起点とする阪大医学部の歩みについて、中之島時代から受け継いだ歴史的な史料が、年表とともに展示されている。このたび、新設された史料館については、大阪大学医学伝習 150 周年を迎えるにあたり 2017 年頃より構想が練られた。当館では、特に、吹田キャンパス移転以降に新たに積み上がった阪大医学部の成果を強調して、現在や未来の医療もアピールする空間づくりを目指した。その役割は、一般の方々より医学研究の理解を得るだけでなく、次世代を担う若い人たちに医学に関心をもってもらい、この道に呼び込むことである。

岸本忠三氏（第 14 代大阪大学総長）の支援により設立され、2F は記者発表や会議・イベントスペースとして学内で利用、1F の展示室は一般に公開されている。展示のデザインについては、幅広い層の来館者に対し、確かな科学のもとに築き上げられる医学研究の進展により、明るい未来を描けるようなイメージに仕上げた。

<展示史料>

1) 研究データベース

阪大医学部でどんな研究がなされているのかを、「身体の部位」「研究者名」「研究キーワード」など、来館者が興味のある切り口から検索できるデータベースを設置。医学系研究科でプレスリリースされた研究成果が全てアーカイブされている。

2) 研究成果から生まれた医療応用

岸本忠三教授の研究から開発された抗 IL-6 受容体抗体とはじめとして、阪大医学部の研究から生まれた実際のモノを展示。最近の成果として、認知症を視線の動きで診断するアプリや、頭蓋内埋込型の脳波測定装置の他、iPS 細胞由来の角膜上皮シートと軟骨組織については、実際の臨床研究でヒトに移植されたものと同等品を研究室で調製したものが見学できる。

3) 企画展「岸本忠三と教育」

現在も研究活動が続ける岸本忠三特任教授の著書の中から印象的な言葉を集め、当時を解説している。

オオサンショウウオの種間交雑に関する深刻な課題 ～広島県の現状と大学博物館の可能性～

○清水則雄¹・阿部勝彦²・田口勇輝²・池田誠慈¹・三浦郁夫³・桑原一司⁴
(¹広島大学総合博物館・²広島市安佐動物公園・³広島大学両生類研究センター・
⁴日本オオサンショウウオの会)

広島県西部の八幡川上流域において2022年5月に国の特別天然記念物オオサンショウウオと外来種であるチュウゴクオオサンショウウオの交雑個体を初確認した。両種の交雑問題は京都の鴨川を発端として、三重県、奈良県、岡山県と確認が相次いでおり喫緊の課題である。本発表では、2022年5月-2024年3月に実施した広島県八幡川における野外調査と遺伝子解析の結果から交雑状況の現状と課題を報告する。

調査では成体110個体、幼体2個体、幼生122個体の計234個体、繁殖巣穴3個、産出卵約1,500個を確認した。成体110個体のうち在来種は20個体で、交雑個体率は81.8%であった。成体の交雑個体はすべて雑種第1代で、幼生及び幼体の交雑個体率は100%であり、全個体が雑種第2代であった(N=124)。交雑オスの繁殖巣穴(N=3)で確認した卵の交雑個体率も100%であった。交雑個体は、在来種よりも有意に全長も大きく体重も重かった。これらから、交雑個体は巣穴と餌資源を占有しており、在来種は繁殖に参加できていない可能性が示唆された。

環境省は今夏の特定外来生物指定を目指しており、今後の交雑個体駆除の具体案の検討が至急必要である。また、現在検討が始まっている新「外来種被害防止行動計画」(案)では、地域単位の対策の徹底と地域間連携の強化が盛り込まれている。今後は自治体と連携した地域単位での防除体制の構築や調査と並行した地域間での「外来種・交雑個体を移動させない」社会教育も極めて重要である。大学博物館は野外調査技術や遺伝子解析技術等を持ち合わせるか、それらの専門研究機関とのネットワークを保有している。また、社会教育施設としての機能も併せ持ち、動物園・水族館等の他の社会教育施設や自治体ともネットワークを保有している。これらのネットワークを活用し、今後の外来種・交雑個体防除の扇の要として地域社会に貢献していくこと。このような対策を行う大学博物館が地域間連携を行うことが、今後の大学博物館の社会での存在意義を高める大切なポイントであると考えられる。



図1 在来種（上）と交雑個体（下）

O-10

大阪大学中之島芸術センター企画展 「服部良一と笠置シヅ子：花開く大阪音曲」

○藺田郁¹

(¹大阪大学中之島芸術センター)

大阪大学中之島芸術センターは、大阪大学において芸術の研究教育の拠点となるべく、2023年4月に開設されました。芸術センターでは多様で実践的な研究・教育事業を実現するために、展覧会を開催するための施設である展示室のほか、収蔵庫や作業室、さらに上演、講演に使用できる楽屋・工房を併設したスタジオを備えており、開設1年目から芸術に関する複数の研究プロジェクトや、大学院教育および社会人教育を実施しています。そうしたなかで開催される本センターの展覧会は、芸術センターの主要な事業を内外に向けて発信する重要な柱として位置づけられます。

今回は、その中から2024年2月20日から3月9日まで開催された企画展「服部良一・笠置シヅ子：花開く大阪音曲」を中心に、本芸術センターの展示事業の特色を提示します。本展示は、近代大阪で花開いたモダンな音楽文化を土台に活躍した、作曲家服部良一と歌手笠置シヅ子をテーマにしたものです。この企画展では両者が大阪での活動を出発点に、大阪のモダン文化を展開させ、その後東京へ進出し「ブギウギブーム」を巻き起こし、近代大阪の娯楽文化を通じて日本全国を席卷していった過程を、四つの段階に分けて紹介しました。展示資料のなかでもっとも重要なものは、服部良一が作曲したものの、録音には至らなかった幻の楽曲《神戸ブキ》で、本展示ではその自筆譜を初公開しました。そしてこの展示をより立体的なものにするために、会期中に本芸術センターのもう一つの主要な設備であるスタジオにおいて《神戸ブキ》の試演を行い、服部良一・笠置シヅ子の軌跡を、展示と演奏という本センターならではの多様な視点から提示しました。本芸術センターでは今後もこうした芸術センターの特色を活かした芸術に関する事業を広く展開していきます。

大学と地元財団の包括連携協定に基づく企画展

○吉田広¹

(¹愛媛大学ミュージアム)

2022年8月、愛媛大学と松山市文化・スポーツ振興財団が包括連携に関する協定を締結し、同財団埋蔵文化財センター・松山市考古館と愛媛大学ミュージアム、愛媛大学埋蔵文化財調査室の三者が、具体的連携事業として企画展を重ねている。

愛媛大学構内の文京遺跡の調査は、当初松山市教育委員会が担い後に愛媛大学が引き継いだため、出土資料の所蔵保管をそれぞれに分け合っており、これを一括して積極的に活用すべく、包括連携事業における合同展示企画としたわけである。

2022年度には、愛媛大学埋蔵文化財調査室調査・愛媛大学ミュージアム常設展示の主要資料を松山市考古館に貸し出し、『愛大発掘～すごいぞ！文京遺跡～』を開催し、愛媛大学教員と松山市考古館職員による、対談形式の講演会を開催するなどした。

2023年度は、松山市考古館から分銅形土製品（顔の表現もしばしばある松山平野の弥生時代に特徴的な板状土製品）をまとめて借用し、大学保管資料とともに、市内出土分銅形土製品の網羅的に集成展示として、『発掘 文京の顔 展 まなざしから弥生人の想いに迫る』を開催し、愛媛大学ミュージアムから松山市考古館に巡回させた。多くの親子連れが大学キャンパスを訪れる学生祭時には、松山市考古館による勾玉作りなどの古代体験教室を行い、通常とはやや異なる来館者層を多く迎えた。松山市考古館への巡回後には一部資料の増補も行うなど展示の充実を図り、愛媛大学教員と松山市考古館職員による対談形式の講演会も、この事業ならではの方式として、参加者に好評を博した。

2024年度も10月から1月に巡回展として、愛媛大学内各所（附属学校や図書館、サークル等）で保管してきた考古資料や、松山市が市内小中学校から考古館へ移管された資料を用いた企画展『学校の戸棚の考古学』を計画準備中である。

各大学において地元自治体等との各種連携事業が多い中、大学博物館はそれを具体化・可視化する場に相応しい。相互が関係した考古資料という特性もあるが、人材の相互補完だけでなく、愛媛大学での博物館展示構築・ポスター作成、松山市でのポスター・チラシの市内学校への配布広報といった具合に、重複のないような作業分担により、経費削減にも繋がっている。厳しくなりつつある博物館運営において、さらなる連携事業の活用拡充を意図していかなければなるまい。

O-12

「Museum と死生観 ——Museum におけるモノの継承」

○古田亮¹

(1 東京藝術大学大学美術館)

Museum という館と制度をつくりそこにモノを収集するのは、近代西洋世界に「知」の欲求があったからである。あるゆるモノを集め、分類し、秩序だて、それを見せることによって啓蒙する、という合理思想に基づく知のあり方、見せ方を具現したものである。一方、19 世紀に帝国主義と植民地主義によって集められたモノに公共性を与えたのが Museum であり、近代国家の歩みに不可欠な文化施設ともなった。日本の場合はこの制度を直輸入したとあってよい。

本発表では、そのような歴史を持つ日本の Museum が持つ課題について、Museum におけるモノの継承という点に限って検討する。日本の Museum は現在、深刻な問題をかかえている。新たな収蔵スペースを確保できないこと。収蔵設備にかかる膨大なエネルギーが予算を圧迫し、脱炭素化問題にもかかわってくること。収集、維持、管理、展示などの仕事量が、そこで働く学芸員や専門職の数と見合っていないこと。さらには絵画・彫刻といったカテゴリーが崩壊し、コンセプト、データといったかたちのないものが収蔵の対象となってきたこと、などである。

こうした Museum が抱えている課題に対して、私たちはどのようなことを考え得るだろうか。現代の美術界では、モノとヒトの関係性が変わり、モノよりもヒトの重要性が増してきたとあってよい。これからの Museum に課せられているのは、もはや 19 世紀的な意味でのモノの継承ではない。誰が、何のために、何を保存するのかを考える必要が差し迫っている。

そこで、本発表では「象徴的な不死」(加藤周一らによる用語)と「供養」いう語をキーワードとして、モノの新たな継承の方法と意義について考察し、これからの Museum におけるモノの継承のあり方について、そして文化の継承方法について、以下の 3 つの提案を掲げる。

第一に、自然にのこされる遺物と、必要なものを収集してつくるコレクションとの対照において、Museum の役割を明確にし実践していくこと。第二に、19 世紀的な制度のままでは対応できない現代美術に対して、これからの Museum はどうあるべきかを見直すこと。Museum は作品にとっての墓場でもなく、また不死の権利を獲得できる制度でもない。モノ自体の保存とは別に代替物やデータ、記憶による継承のあり方を研究していくこと。第三に、作家の生誕や没後などの周年に際して展覧会を企画することを「供養」と捉えることができるならば、展覧会というイベントはヒトとモノの文化的な継承方法のひとつである。これを Museum の責務において展開していくこと。

Museum という制度は西洋的な死生観のもとに不死を獲得するためにつくられたという一面を持つ。だが、この先は、ここに挙げたような東洋的な死生観に基づく「象徴的な不死」の Museum 的な実践について検討する余地があるだろう。

形態機能学評価が示す博物館の「はぐくむ」姿とは何か

○永田裕美¹・中村滋彦²・上出広幸³・藤谷泰裕^{2,4}・寺林優⁵・松本由樹¹

(¹香川大学農学部・²姫路港運株式会社・³株式会社興徳クリーナー・

⁴昆虫ビジネス研究開発プラットフォーム・⁵香川大学博物館)

世界では、ヒトと動物の福祉は相関する報告が2000年以降で約1万9千件ある。一方で、日本の動物福祉に関する社会受容性は、高まっていない。

多様な人が訪れる博物館機能としての「むきあう」姿を、形態機能学評価用い展示手法を取り入れた結果をOneWelfare2023 History 国際学会で発表したところ、ヒトと動物の福祉を適える動物福祉観の醸成を議論する場として博物館で実現したことが世界的に高く評価された。

香川大学博物館では、これまで企画展を通じて、香川大学農学部で実施されている畜産学講義や動物生産飼養管理、昆虫生産を紹介し地域の人との対話を行ってきた。

本発表では、動物福祉の刷新に重要な動物生産の新たなゲームチェンジャー「昆虫生産における昆虫福祉飼養管理」について形態機能学評価を交え事例紹介するとともに、ヒトと動物、昆虫と環境の健康を適えることにおいて重要な役割をもつ福祉観について問うものである。

※形態機能学評価

人体の構造と機能を理解し日常生活動作や事象について説明する評価方法でこれを用いて健康維持管理、環境調整や安全性の確保といった行動アセスメントに利用することができる。動物や昆虫の評価も可能である。

※動物福祉

ヒトが管理する動物が健康で幸福な状態を目指し、動物が自然な行動をできる環境を整えストレスをかけず健康的に飼育する、また痛みのない屠殺を行うことである。

※昆虫福祉

動物福祉同様の飼育管理、屠殺を実施することであり、昆虫福祉は、動物福祉の根幹をなすものである。

O-14

鉾山県・秋田を未来につなげる ～未記載鉾石標本の継承を目的としたデータベース化事業～

○西川治¹

(¹秋田大学大学院国際資源学研究科附属鉾業博物館)

国内の資源産業は高度成長期から衰退がはじまり、90年代にはほとんどの金属鉾山が閉山したために、国内産の鉾石標本は大変希少なものとなっている。地方の小規模の鉾山系資料館には、地域の鉾山から産出した学術的価値の高い鉾石標本が収蔵されているが、専門的な知識を有する資料館職員が配置されておらず標本台帳も整備されていないなど、標本管理体制が整えられずにいる施設が多い。また、急速に人口減少が進む地方では、今後、収蔵品を安定的に管理することが難しい状態に陥ることも懸念されている。

鉾業博物館と県内の鉾山系4資料館は、あきた鉾山系資料館ネットワークを結成し、資料館活性化のための様々な活動を行っている。ここでは、鉾業博物館が中核となって他の資料館活動に積極的に関与しており、将来的には標本の管理と活用の施策を一体的に行うことも視野に入れている。2023年度には、標記の事業が令和5年度文化庁 Innovate MUSEUM 事業に採択された。本事業は、秋田県内の鉾山系資料館が所蔵する貴重な鉾石標本を適切に管理し未来に確実に継承するための基盤を構築することを目的として、①各資料館が所蔵する鉾石標本の記載および台帳の整備と、②代表的な標本のデジタルアーカイブ化を行った。

①では、鉾物・鉾床学分野の専門家の目を通して、地方の鉾山系資料館が所蔵する鉾石標本の管理状態をチェックするとともに、データベースを構築した。データベースは、冊子体の標本台帳として各館が保管しているほか、PDF ファイルを一般公開している。今回、開館以来ほとんど手つかずの状態であった標本管理の基盤を整備できた意義は大きい。

②の代表的標本の3D動画では、標本の紹介コメントとともに、回転動画や細部の拡大画像などによって、標本のみどころや魅力をアピールすることができた。また、一部に過ぎないが、学術利用に資する標本の学術データも取得し、標本の高度利用の足がかりができた。

秋田大学鉾業博物館のHP上の「あきた鉾山系資料館ネットワーク」のサイトにおいて、本事業の成果品を公開している (<https://www.mus.akita-u.ac.jp/>)。この事業を通して、資料館の職員は、標本の取り扱いの注意点を学習して、標本の適切な管理が資料館運営において大変重要であることを理解するとともに、標本の価値を再発見し見せ方を意識した展示を考えられるようになったと思われる。

O-15

博物館法改正に伴う大学博物館の在り方

○栗原祐司¹（¹国立科学博物館）

昨年6月の第18回日本博物科学会において、令和4年4月に改正、翌5年4月から施行された新しい博物館法に伴う大学博物館の在り方について、以下の問題提起を行った。今回は、そのフォローアップを行い、今後の課題について改めて問題提起することとしたい。

- 日本の博物館政策全体を考えるのであれば、文化庁や文化審議会だけでなく、文部科学省研究振興局や科学技術・学術審議会等とも協働し、組織横断的な大学博物館の在り方に関する議論が必要なのではないか。
- 今後、文化審議会において、学芸員養成課程の見直し等に関する議論を行う際には、単に文化政策としてではなく、高等教育や生涯学習政策とも連携した総合的な検討を行うよう、大学博物館関係者から積極的に働きかけるべきはないか。

文化審議会博物館部会においては、昨年2月6日の時点において①「博物館の設置及び運営上望ましい基準」の在り方について、②学芸員制度の今後の在り方に係る検討（中長期的な課題として）を掲げていながら、昨年度は3回しか会議を開催しておらず、学芸員養成課程については、「大学における学芸員養成課程の科目のねらいと内容」及び「博物館実習ガイドライン」（いずれも法令上は国の指導文書扱い）の微細な修正にとどまり、「望ましい基準」については、ほとんど議論がなされなかった。そして、今年度より劇場・音楽堂等を含めた文化施設の機能強化を検討するため、博物館部会を「文化施設部会」に改組し、同部会に「博物館の機能強化に関するワーキンググループ」を設置し、博物館の運営の在り方や「博物館の設置及び運営上の望ましい基準（告示）」等を検討することとされた。塩見文部科学省研究振興局長からは、今後に向けて大学研究基盤整備課や学術企画室の担当者との間で意見交換などを行うことも有益ではないかとの意見を頂戴しており、大学博物館等協議会においても、何らかのアクションを起こすべきではないか。

第 27 回大学博物館等協議会・第 19 回日本博物科学会実行委員会

委員長：辻 瑞樹（琉球大学博物館（風樹館））

委員：佐々木 健志、平良 渉（琉球大学博物館（風樹館））

事務局：琉球大学博物館（風樹館）

第 27 回大学博物館等協議会
第 19 回日本博物科学会
大会案内・要旨集

発行日：2024 年 6 月 27 日

編集：平良 渉

発行：第 27 回大学博物館等協議会・
第 19 回日本博物科学会実行委員会

発行所：琉球大学博物館（風樹館）



風樹館

琉球大学博物館